

## 活動報告

野老澤の歴史をたのしむ会

記 小川 雅愛

### 所沢七福神めぐり

実施日 令和2年(2020年)2月6日(木)

時 間 9:00~15:00

参加者 22名(2月入会予定者1名を含む) : 内訳-男性14、女性8

配布資料 「所沢七福神めぐり」市民案内版(公民館用) B4判2つ折(B5)

「所沢七福神めぐり」案内(寺院用) B4判3つ折(B6)

\*2点 所沢七福神「八国山、荒幡富士コース」霊場会編

#### §1 はじめに

立春、節分も過ぎた七福神めぐり実施の2月6日は、昨日まで続いた暖冬の日々から一転して、北風が吹き抜ける寒い日となった。1月早々、巷には新型コロナウイルス肺炎の蔓延、イギリスのEU離脱、IRや桜を見る会をめぐる国会審議等の報道があり、国内外とも騒然とした世相の中、念願であった所沢七福神めぐりの開場が関係者のご尽力で今年から始まったのは地域にとって明るい話題といえる。

七福神めぐりは正月1月中がふさわしいと思うが、当会の1月活動は一回の予定で、昨年1月の予定は決定していて追加は無理であった。それでもできるだけ早いうちに会の活動計画にとり入れたく、今回の活動実施となった。七寺をめぐり歩く距離の長さ当日の天気予報では厳しい寒さであったので、参加者は少ないと思われたが20名以上の参加があり、大人数で連れだった七福神めぐりとなった。

#### §2 サークルの活動のための順路

公民館や各寺に置かれた案内書の推奨コース①~⑦に基づき、昨年末下見を実施したが、途中の道に迷ったりして、結局2日がかかりとなった。推奨コースを一日でめぐるのは若い方や春になってご家族や仲間内での桜見物、ハイキングを兼ねてめぐるのには適していると思われるが、寒冷期のこの時期、高齢者のサークルにはやや厳しい。

そこで当会の順路は1. 歩く距離を短縮するためバス、電車も活用して1日で完遂する。  
2. 寒い中、休憩場所、トイレ休憩を設ける。3. 昼食を挟み、福神めぐりだけでなく、同

時に各寺の史跡・文化財の見学、道々での梅見をたのしむ 4. コース歩きはできるだけアップダウンを避けて行く。5. 仮に、体調などによりリタイヤする際、駅近くから帰れるよう配慮する。以上により、下記のようにお参りの順路を決めた。

＜順 路＞ 歩き約 7.5～8 km、最初はバスで行き、途中も電車で繋ぐ。

所沢西口発西武園行 9：15<sup>バス</sup>～水天宮下下車・9：30 ①福祿寿 佛眼寺（久米）<sup>歩き</sup>—  
吾妻公民館（トイレ・休憩）<sup>歩き</sup>—②寿老人 光蔵寺（荒幡）<sup>歩き</sup>—③布袋尊 本覚院（荒幡）<sup>歩き</sup>—  
④毘沙門天 海蔵寺（山口）<sup>歩き</sup>—11：30 昼食（休憩）12：40<sup>歩き</sup>～下山口駅<sup>電車</sup>—西所沢  
駅<sup>歩き</sup>—13：20 ⑤弁財天 永源寺（久米）<sup>歩き</sup>—⑥大黒天 長久寺（久米）<sup>歩き</sup>—⑦恵比寿天  
持明院（北秋津）<sup>歩き</sup>～14：50 所沢駅 解散予定 で計画を立てた。

以上の計画で実施し、七福神めぐりは順調に進んだ。2，3名はご都合により昼食後の三福神めぐりを残し早退されたが、ほぼ予定通りに七つの福神をめぐり、予定した 15：00 に所沢駅に帰着した。以下に各寺めぐりの様子を報告します。

### § 3 七福神めぐりと寺院の様子…七福神の各解説は省略する。

#### ① 佛眼寺—真言宗豊山派 福祿寿

山門を入ると真新しいほぼ真っ白な福祿寿の石造と赤い所沢七福神と書かれた幟があり、すぐに七福神のお寺とわかる。永源寺の弁財天以外はすべての六福神は新品のピカピカの白い像であった。福祿寿の台座には寄進されたと思われる所沢美術館館長平塚宗臣氏のお名前が記されている。なお、当寺が創建年代は七つの寺の中で最も古いとみられている。



佛眼寺 福祿寿をめぐる

山門前には二十三夜搭が庚申搭と並んでおかれている。二十三夜搭は月待供養塔の代表的なもので、仲間が集まって念仏などを称え、飲食をしながら月の出を待つ信仰行事を示すものであった。月待供養塔は市内には三つのみ、その一つが当寺にある。

寺を出て、次の光蔵寺までは水天宮方向の西へ向かう山道（ハイキングコース）を通れば最短コースであるが、北に向かう小峠を越え、吾妻公民館でトイレ休憩をとる。

## ② 光蔵寺—真言宗 寿老人

西武園駅に向かう道路わきに佇む、屋根の様式が美しい寺院。門を入ってすぐ小さな庭の脇に真新しい寿老人像がある。本堂脇を奥に進むと参道と墓地があり、慶長年間に再興されたためか 17 世紀の古い石造が墓地の中に多く見られる。荒幡地区の路地を 5, 6 分歩くと次の本覚院に着く。

## ③ 本覚院—真言宗豊山派 布袋尊

平成 12 年に新築再建されたので、すべてが真新しく美しい。本堂の柱の陰のやや目立たない場所に布袋尊が鎮座している。庭の向うの壁側に古い石造が一行に並んでいる。

この先、荒幡から山口にかけては迷路のような道だが参加者で住んでいる人もいて、迷うことなく、午前中のお参りの最後、海蔵寺に向かう。



本覚院 布袋尊



長久寺 大黒天

## ④ 海蔵寺—真言宗豊山派 毘沙門天

山口城跡から柳瀬川、西武線を挟んだ対岸側にあり、城のあった南北朝時代は屋敷や店があった町谷と呼ばれる地区に海蔵寺は建造され、民衆の菩提寺となっていた。本覚院から徒歩 14、5 分のところにある。

脇道を入ると、寺の境内とは感じさせない広々とした場所に海蔵寺は建っている。庭の西端に毘沙門天像が置かれている。思ったより小さい。お寺が冬の日を浴びてあまりに綺麗なの

で、もう一回、集合写真を撮る。鎌倉の海蔵寺との関係が深く、この寺の創建時ごろの住職が真言宗豊山派の総本山である大和桜井の長谷寺へ栄進した経緯があり、俗に出世寺と呼ばれているという。ここを終えるとちょうど 11 時 40 分、近く中華料理チェーン店バーミヤンで昼食と休憩をとった。昼食後は下山口駅から西所沢駅まで電車で移動した。



海蔵寺 毘沙門天を拝む

#### ⑤ 永源寺一曹洞宗 弁財天

西所沢駅から東の踏切を渡り、線路際の坂道を下っていくと間もなく永源寺に着く。本堂とは道を挟んだところに弁財天が弁天池の中のお堂にある。ここだけは弁財天の姿は拝みにくい、格子の中にあるのだろうと想像する。室町時代この地域の守護代大石氏に関係があり、武家ゆかりの寺院である。寺の脇の山際の墓地で一際目立つ仏塔のある祠があり、その中に大石信重の墓があった。「ところざわ歴史物語」にも写真が掲載されている著名な史跡である。ここまでのお寺にもあったのだと思うが、江戸時代、増上寺に各藩主より寄進された数多くの石灯籠は、かつて増上寺から移され、西武鉄道が一時保管した。のちにその一部が市内の寺院に贈られたとされるが、その現物を当寺院で初めて目にする。増上寺の文字がはっきり見える。もっと早く気が付けばほかのお寺でも確認できたと思う。どの大名から贈られたのか拓本をとり確認していくのもたのしい歴史の学びになるかもしれない。ここは雪割草の名所とのことだが、現在はなくなったのかもしれない



早くも満開の梅



元々は増上寺にあった石灯籠

#### ⑥ 長久寺一時宗 大黒天

永源寺から長久寺への道は建設中断中のバイパス終点から所沢駅、東村山方面への抜け道になっているため車の往来が激しく、あまり推奨できないルートではあるが、平坦で最短でいける。門を入って直ぐ脇に大黒天がある。所沢では唯一、埼玉県内にも珍しい時宗の寺院である。当会では旧鎌倉街道を歩いた今年の活動等でおなじみのお寺である。時宗の僧侶は元弘の小手指が原の合戦以降、鎌倉街道沿いで行われた数々の合戦の死者をその都度、同行し弔ったという。藤沢市の大学箱根駅伝で有名な遊行寺坂にある時宗総本山の遊行寺とは鎌倉街道でつながっており、これが寺の創建に深く関係しているかもしれない。

#### ⑦ 持明院一真言宗 恵比寿天

最終の七つ目の福の神様恵比寿天までお参りが進んだ。長久寺からは少し登りきると、東村山へ向かう街道に出る。それを下っていくと右側の脇道の入口に持明院の看板がある。普段なかなか気につきにくいところである。柳瀬川の左岸崖の上にあり、上から竹藪越しに見ると深い淵になっている。ここは曼荼羅淵と呼ばれ、所沢の民話「河童のわび証文」の舞台でもある。七福神の寺では佛眼寺に次ぐ古い名利、秋津の不動様として親しまれている。

それにしても持明院という名称は、建武の新政から南北朝時代の持明院統と大覚寺統の皇室の系図を連想させる。京都の持明院と関係があるのかもしれない。

七福神めぐりが、地元所沢で行えるようになり、早期に体験したいと思っていたが、厳寒期であったが実現できて達成感を感じている。市民新聞やショッパーなどで紹介され、七福神めぐりの開場は久々の明るいニュースと思い、所沢在住の働き盛りの方二人に所沢に七福神めぐりが開場になったことを知っているか尋ねたが、知らないという。

まだまだ、市民が育てていく観光資源としてはこれからだと思う。サークル等でもできる限りふるさと所沢の文化として大事にしていきたいと思う。 以上 \*次頁参考資料

## 【参考資料】

### ① 七福神めぐりの寺院の創建、開基——（ ）内は年代とご本尊

七福神の寺院を古い順に並べると 佛眼寺（奈良時代末～平安時代、阿弥陀如来）→持明院（平安時代、不動明王）→光蔵寺（平安時代、戦国から江戸時代再興、釈迦如来）→長久寺（鎌倉時代）→本覚院（南北朝時代、不動明王）→永源寺（室町・安土桃山時代、弁財天）→海蔵寺（室町・安土桃山時代、釈迦如来）というようになると思う。

\*年代は不確定のものもある。 参考図書「所沢の歴史と地理」内野実氏著の年表

### ② 七福神めぐりの由来

七福神の神様については配布資料に丁寧な解説があるので省略するが、恵比寿が日本、大黒天・毘沙門天・弁財天がインド、福祿寿・寿老人・布袋が中国 と三つの国の出身である。七つの神とした根拠は仏教の経典説と竹林の七賢人説など諸説あり、はっきりと断定できない。七福神の信仰は室町時代に始まり、江戸時代に民衆を巻き込んだブームとなって、今日に伝わっている。

参考図書「日本の神様・仏様まるごと事典」廣済堂出版

### ③ 永源寺 久米領主大石信重の子孫について

信重の数代を経て、資料に登場するのが、大石定久である。

戦国期には八王子城を本拠地として、府中市・あきる野市・所沢市・飯能市にわたる広い地域を支配していた。やがて、大石氏は川越夜戦が大きな転機になり、北条氏の支配を受けるようになる。大石定久（道俊）は、実子大石憲重にかえて、北条氏康の次男氏照（実際は三男であるが、長男、幼名伊勢新九郎が夭折し、氏政が長男、氏照が次男となる）を養子に迎え、のちに大石氏の名跡と旧領を氏照に譲った。こうしたやり方は氏康の領国支配の形態であり、鉢形城では藤田氏に三男氏邦を養子縁組させたことも同様である。こうして大石氏の名前は所沢近辺の寺社の文書から消え、代わって北条氏照名の文書が顕著になる。

参考図書「東京都の歴史」 山川出版社

### ④ 増上寺名の石灯籠

芝の増上寺は徳川家康が関東入府以来、徳川家の菩提寺として、京都の知恩院と並ぶ、大きな領地と広い敷地をもつ寺であった。徳川の将軍では第2代秀忠、家宣・家継・家重・家慶・家茂の各将軍・夫人の墓所となっていた。霊廟を囲む参道があり、参道には病氣平癒の祈願や葬斎などの都度、諸藩の大名から寄進された石灯籠が列をなしていた。寺は東京空襲で被災し、戦後再建されたが、以前より一回り小さいものとなった。霊廟の参道部分を含む一部の敷地は西武鉄道に譲渡され、その時、参道の石灯籠（約1,000個という）は一緒に西武鉄道にわたり、西武不動尊の近くに一時は野積み状態であったという。これがのちに近隣の寺院を中心に、希望のお寺に譲られたという。 参考 江戸の地図、小学館辞典ほか

今回の主担当 安田 小川

協力者 上記のほか E グループメンバー 上村 西脇 石田 田口 田沼 國谷 柴崎